《特集　オーストリア皇妃エリーザベト：歴史・映画・演劇の中の虚像と実像》

映画によって作られた皇妃のイメージ[1)]

常　石　史　子

1. はじめに

オーストリア皇妃エリーザベトを描いた映画としては、ロミー・シュナイダー主演、エルンスト・マリシュカ監督による『プリンセス・シシー』以下の三部作（1955～57年）が広く知られている。だが1920年の無声映画「オーストリア皇妃エリーザベト」（*Kaiserin Elisabeth von Österreich*）を皮切りに、息子であるルドルフ大公のマイヤリンクにおける情死事件に材を採ったもの、純然たるフィクションのオペレッタ作品なども含めると、エリーザベトの登場が配役などで確認できるものだけでもおおよそ20作品にのぼる。本稿はこれらエリーザベト関連の映画が出現した契機と、拠って立つ文脈とを整理し、皇妃のイメージが映像表現においてどのように形作られていったかを考察する。その作業を通じて、現行のミュージカルにおけるエリーザベト像の源泉となるようなイメージを映画史のうちに見出すことを目指す。

2. ハプスブルク君主国解体（1918[2)]）

第一次世界大戦の敗戦により、オーストリアの帝政時代は終わりを告げた。

1）本稿は、2022年8月6日に開催された獨協大学オープンカレッジ特別講座「オーストリア皇妃エリーザベト：歴史・映画・演劇の中の虚像と実像」において行った講演の内容に加筆修正をほどこしたものである。映画の日本公開題名は二重括弧で、日本未公開の作品については筆者による仮題を一重括弧で示している。

2）オーストリア＝ハンガリー二重帝国は1918年10月に解体し、ドイツ＝オーストリ

旧帝国の版図をおよそ4分の1にまで大幅に縮小され、不安定な政権、極度のインフレと不況で、政治的にも経済的にも苦難の時期が始まった。

エリーザベトの夫、フランツ・ヨーゼフ1世は新進のメディアであった映画に関心が高く、1903年のブラウナウ訪問以降、儀式や狩猟などさまざまな機会に記録映像の撮影を許していた[3]し、1916年、フランツ・ヨーゼフ1世の逝去を受けて帝位を継承したカール1世の戴冠式も、フィルムに記録されている。帝政期においては、現実の皇帝一家の実写映像そのものが大衆にとって大きなアトラクションであったわけだが、帝政の終焉を期に、皇帝一家の物語がフィクションとして描かれ始める。その口火を切ったのが、エリーザベトの息子ルドルフ皇太子のマイヤリンクにおける情死事件を扱った「ルドルフ皇太子、またはマイヤリンクの秘密」(*Kronprinz Rudolph oder: Das Geheimnis von Mayerling*, 1919)[4]であるが、時期尚早であったのか検閲不許可となっている。なおマイヤリンクの悲劇を扱った作品としては1925年にも「お付きの御者、ブラートフィッシュ」(*Leibfiaker Bratfisch*)[5]が製作されている。いずれもエリーザベトが登場している可能性があるが、配役には名前が確認できず、フィルムも現存していない。

2.1. 「オーストリア皇妃エリーザベト」(*Kaiserin Elisabeth von Österreich*, 1920)

エリーザベトを正面から扱った最初の映画は、1920年の「オーストリア皇妃エリーザベト」で、エリーザベトの姪で個人的に親しかったマリー・フォ

ア共和国と称していたが、1919年9月に成立した連合国とオーストリアとの講話条約(サン＝ジェルマン条約)でドイツとの併合が禁止されたことにより、オーストリア共和国となった。

3) 現存するフランツ・ヨーゼフ1世の実写映像はフィルムアルヒーフ・オーストリアによって収集され、DVD「映画の中の皇帝 フィルム史料に見るフランツ・ヨーゼフ 1 世」*Kaiser im Kino: Franz Joseph I. in historischen Filmdokumenten*. Verlag Filmarchiv Austria, 2016にまとめられている。

4) ドイツ／監督：ロルフ・ランドルフ。

5) オーストリア／監督：ハンス・オットー・レーヴェンシュタイン。

ン・ラリッシュ伯爵夫人が 1913 年に刊行した回想録[6]にもとづいている。この著作は皇妃にごく近くで接していた著者が、エリーザベトのほかフランツ・ヨーゼフ 1 世、その恋人カタリーナ・シュラット、エリーザベトと親しかったハンガリーのアンドラーシ伯爵、ルドルフ皇太子、その恋人マリー・フォン・ヴェッツェラといった宮廷の人々について赤裸々に記録したある種「暴露本」的な内容であり、「スキャンダル文学」として知られていた[7]。感傷をふんだんに散りばめた主観的な筆致で、真偽を確かめようのない記述が多いが、会話を多用した文体には臨場感があり、絶大な支持を集めていた。大衆のゴシップ趣味を明確にターゲットにして成功した本書の知名度は映画においても盛大に宣伝に利用され、著者が本人役で出演までしているというメディア・ミックスの先駆けとも言うべき事例である。皇妃の暗殺や葬儀についても記述がある。

この映画についてはフィルムが部分的に現存しているほか、エリーザベトの死の床の場面からとられた、白い薄絹の下から死顔がうっすらと透けて見える印象的なスチル写真がある[8]。この写真はフィクション映画の一場面の宣伝用写真の一枚に過ぎないが、あたかも皇妃エリーザベト本人のものであるかのように、「皇妃エリーザベトの死の床」（Kaiserin Elisabeth von Österreich auf dem Totenbett）との標題を付したイメージとして（良心的な場合には映画の一場面であることを注記して）流通した。つい十数年まで実在していた人物が映画のなかでありありと「再現」されたことで、その像のフィクション性は容易に取り払われ、イメージが独り歩きを始めたのである。ここには晩年のエリーザベトが、容姿の衰えを気にしてほとんど人前に素顔を晒すことがなかっ

6）Marie Louise von Wallersee-Larisch (2014), *Meine Vergangenheit: Wahrheit über Kaiser Franz Josef, Schratt, Kaiserin Elisabeth, Andrassy, Kronprinz Rudolf, Vetsera*. Innsbruck: University of Innsbruck.（1913 年刊行のオリジナル版のリプリント版）

7）Nicole Karczmarzyk (2017), *Mediale Repräsentationen der Kaiserin Elisabeth von Österreich: Sissi in Film, Operette und Presse des 20. Jahrhunderts*. Leiden/ Boston/ Singapore/ Paderborn: Wilhelm Fink Verlag, S. 60.

8）以下のウェブサイトで閲覧が可能。https://austria-forum.org/af/Bilder_und_Videos/Historische_Bilder_IMAGNO/Elisabeth%2C_Kaiserin_von_%C3%96sterreich/00633250#（2024 年 1 月 31 日最終閲覧）

たために、そのイメージが多くの人々に渇望されていたことも関係しているだろう。

後述するように、古き良き時代をノスタルジックに描く後年の作品は「エリーザベトの最期」をタブーとし、触れずに終わるようになってゆく。この最初のエリーザベト映画においてそれが明示的に描かれ得たことの背景として、本作がオーストリアではなく、エリーザベトの出身地であるドイツのバイエルンで製作されている事実も重要である。エリーザベトがバイエルンの人々にとってとりわけ重要な存在であったことに加え、彼女を悲劇に追いやったオーストリア皇帝一家に対する批判的な姿勢をもそこには読み取ることができるだろう。

2.2.「ハプスブルク家の運命 ── ある帝国の悲劇」(*Das Schicksal derer von Habsburg. Die Tragödie eines Kaiserreiches*, 1928)

無声映画期につくられたいま一本の重要な作品が「ハプスブルク家の運命 ── ある帝国の悲劇」である。マイヤリンクの悲劇をメインに、皇妃エリーザベトの暗殺、サラエボ事件、フランツ・ヨーゼフの葬儀、カール 1 世の亡命までを描くもので、事件の実際の記録映像を一部使用し、事件が起こった場所で新たに撮影を行ってもいるセミドキュメンタリーというべき作品である。フィルムの一部と各種の宣伝資料(図 1)が現存しており、使用された実写フィルムは以下の 3 作品であることがわかっている。

- 「サラエボにおける皇位継承者[9]の暗殺」(*Die Ermordung des Thronfolgers in Sarajevo*, 1914)
- 「ウィーンにおける皇帝フランツ・ヨーゼフの葬儀」(*Die Beerdigung Kaiser Franz Josefs in Wien*, 1916)
- 「前線のカール皇帝」(*Kaiser Karl an der Front*, 1918)

9) フランツ・フェルディナント大公のこと。

図 1 「ハプスブルク家の運命 ── ある帝国の悲劇」プレス資料。フィルムアルヒーフ・オーストリア所蔵。via European Film Gateway

1920 年版と同じラッフェ監督によるドイツ作品であり、消滅してまもないハプスブルク君主国のドラマを、一定の距離をもって客観的に映像化しようとする姿勢がうかがえる。

2.3. 「エリーザベト・フォン・エスターライヒ」（*Elisabeth von Österreich*, 1931）

1920 年代末に起こった映画におけるトーキー化の波は、エリーザベト映画の領域にも及んだ。「エリーザベトの声を聞きたい」という大衆の期待に応えてか、1931 年にはすぐさまトーキーでの映画化が実現している。エリーザベトと義母ソフィとの確執、および息子ルドルフとの関係を中心にエリーザベトの生涯が描かれる。フィルムが現存しており、エリーザベト暗殺の直接的な描写が残されている。ジュネーヴのホテル・ボー・リヴァージュを出て、レマン

湖とローヌ川の境目あたりに位置するモンブラン橋付近の、フェリー乗り場へ向かって歩く間に襲われた皇妃の最期の足どりを忠実に再現している。ミヒャエル・クンツェ脚本・作詞のミュージカル版（以降クンツェ版と記載）における同場面の描写とも直接の共通点を多数見出すことができるだろう。初期トーキー特有の、環境音と声とが不自然に分離した音響のなか、エリーザベトの微かな悲鳴がかえって生々しく響く。ヴィンターハルターによるよく知られたエリーザベトの肖像画（図 2）を、衣装や髪型だけでなくその身体の存在感で模倣する主演のリル・ダゴファーは、1955 年にロミー・シュナイダーにその座を譲るまで、謎に包まれた皇妃エリーザベトを生身で体現する存在となった。

＊　＊　＊

以上見てきたように、ハプスブルク君主国の崩壊後、戦間期のエリーザベト表象は、程度の差はあれ、歴史上の人物の実像に迫ろうとするものであった。主要な 3 作品はいずれもオーストリアでなくドイツの製作であり、ヴァイマール期の自由な文化風土を反映して、帝政時代に対する批判的アプローチを基本に置いている。その文脈においてエリーザベトは自らを囲い込んだハプスブルク君主国に対する内部からの抵抗者、批判者と位置付けられていたとひとまずは総括することができる[10)]。

3. オーストリア国家条約調印（1955）

1938 年の独墺合邦（アンシュルス）により国家としてのオーストリアは消滅し、一つの州としてドイツに組み込まれた。第二次世界大戦におけるドイツの敗戦から 10 年を経て、1955 年 5 月 15 日のオーストリア国家条約調印により、オーストリアはようやくアメリカ、イギリス、フランス、ソ連の 4 カ国による分割占領を脱し、主権を回復した。じつに 17 年ぶりに蘇生した国家の再出発に、傷ついたアイデンティティの拠り所となる物語が強力に求められたこ

10）Nicole Karczmarzyk (2017), S. 59.

図 2　フランツ・クサーファー・ヴィンターハルター画（1865）

とは想像に難くない。そこで、占領期においては民族意識の称揚につながりかねないために封印されていた帝政時代の物語が、新生オーストリアの精神的支柱としての役割を新たに担うべく、再び召喚されることになった。

3.1.「郷土映画」としての『プリンセス・シシー』三部作

オーストリア皇妃エリーザベトを描いた映画として最も広く知られる『プリンセス・シシー』（*Sissi*, 1955）以下の三部作は、まさにこの時期に出現している。オーストリアという国家の再出発を記念するものとして、当初からたんに娯楽映画の一本というにとどまらない、大きな政治的使命を負わされた作品と言える。監督のエルンスト・マリシュカはこの前年、イギリスのヴィクトリア女王の、夫アルバートとの出会いを扱った『女王さまはお若い』（*Mädchenjahre*

einer Königin, 1954)[11]をロミー・シュナイダー主演で成功させており、これが『プリンセス・シシー』に直結した。なお『女王さまはお若い』は1935/36年にマリシュカが脚本を手がけた同名作品[12]のリメイクであり、1935/36年版では脚本のみの担当だったマリシュカが、新たに監督も任されたものである。さらに起源を遡るならば、マリシュカはエリーザベトの物語としてはすでに1932年にオペレッタ「シシー」(*Sissy,* 1932年12月23日、テアーター・アン・デア・ヴィーンにて初演)をフリッツ・クライスラーおよび兄のフーベルト・マリシュカと共作して大ヒットに導いており、その脚本はウィーン出身でハリウッドのスター監督となったジョゼフ・フォン・スタンバーグがアメリカで監督した映画『陽気な姫君』(*The King Steps Out,* 1936)の原案ともなっている。つまり、戦前から皇室・王室を扱う娯楽的なジャンルの牽引者であったマリシュカが、前作までにすでにプリンセスのイメージを存分にまとっていたシュナイダー[13]を再度起用し、満を持して自国[14]の皇妃、エリーザベトに挑んだのである。

1作目の『プリンセス・シシー』は、フランツ・ヨーゼフがバイエルンを訪れシシーに求婚し、ウィーンで婚礼を挙げるまでを扱う。前半では、バイエルンのポッセンホーフェンで野生児のように自由を謳歌するシシーの少女時代が理想化されて描かれる。そこにフランツ・ヨーゼフが現れるくだりは、いわゆる「郷土映画」(Heimatfilm)[15]の典型的な舞台設定である。郷土映画とは、

---

11) オーストリア／監督・脚本：エルンスト・マリシュカ／ヴィクトリア女王役：ロミー・シュナイダー。

12) ドイツ／監督：エーリッヒ・エンゲル　脚本：エルンスト・マリシュカ／ヴィクトリア女王役：ジェニー・ジュゴ。日本未公開。

13) シュナイダーは『プリンセス・シシー』の前の作品『最後の人』(*Der letzte Mann,* 1955. これもサイレント作品のリメイク)の撮影にあたって、「初めての現代劇の役。これまでの私ときたら、いつも夢でさえ見たこともない過去の時代の王女とか女王とか町娘とかばかりを演じてきた。今度こそ、私たちの今の時代を扱った映画に出られるのだ」とその喜びを綴っている(ロミー・シュナイダー(1991)『ロミー・シュナイダー 恋ひとすじに』レナーテ・ザイデル編、瀬川裕司訳、平凡社、p. 122)。

14) マリシュカ、シュナイダーもともにウィーン出身である。

15) 郷土映画についてはKristina Kaiser (2009), *Der deutsche Heimatfilm von 1950 bis 1970: Eine Untersuchung des Wandels des Heimatbegriffes*. Norderstedt: Grin Verlag を参照の

1950年代に主にドイツで量産された大衆的な娯楽映画の一大ジャンルである。山岳・田園風景を背景に展開される、田舎娘と都会から来た青年の恋物語が主軸となるのだが、シシーの物語はこれを忠実に反復している。この生の躍動に満ちたエリーザベト像は、クンツェ版のミュージカルにおいてもふんだんに取り入れられ、死の欲動に浸された後半部分と鋭い対照をなしている。

第2作の『若き皇后シシー』（*Sissi - Die junge Kaiserin*, 1956）は1作目とは趣を異にし、義母ゾフィーとの確執が描写の大きな柱となる。一方で、ハンガリー貴族アンドラーシ伯爵との関係にも焦点が当てられ、ハンガリー王妃としての戴冠式までを扱っている。

第3作『エリザベート 運命の歳月』（*Sissi - Schicksalsjahre einer Kaiserin,* 1957）は、ハンガリー滞在、マデイラ島での結核療養生活といったエピソードを描き、結末部のヴェネチア公式訪問で、エリーザベトに対する群衆の態度が反感から讃美へ180度転換する場面がクライマックスとなっている。群衆の心を動かすのは、末娘マリー・ヴァレリーにエリーザベトが示す確かな愛である。映画は皇妃の悲運を折々に描きはするものの、救済としての家族の絆を強調することで、悲劇として終わることを巧みに回避したのである。シシー役によってイメージが固定し過ぎることを恐れたシュナイダーが続投を拒否したことなどから[16]、結果的にエリーザベトの死を描かないままシリーズは終わりを迎えた。かくして三部作はこの曖昧なハッピー・エンドによって国民的映画としての人気を長く維持し、クリスマスのテレビ放映の定番ともなった[17]。

こと。なお『プリンセス・シシー』は当文献の郷土映画リストには含まれていない。

16）「ドイツの、フランスの、そして世界中の監督が、批評家が、そして俳優仲間たちも、私のことをシシーとしてしか見ていなかった。その結果、私にはほかの役柄が全然来なくなってしまった。（中略）二度目のシシーのときにも、私はいやだと言った――でも結局は、三回も演じてしまったのだ」（シュナイダー（1991）、pp. 203–204）。シュナイダーは後年、『ルートヴィヒ』（*Ludwig*, 1972）でエリーザベト役を再び演じた。

17）エリーザベトの誕生日が12月24日であったことにもよる。

3.2. 新技術によるオペレッタ作品のリメイク

1950年代、映画は二つの大きな技術的転換を経験していた。第一に映画のカラー化である。ドイツにおいては英米の「テクニカラー」に対抗するため、アグファ社がナチス政権の強力な後押しを受け、1940年には現行のものと原理的にほぼ同等のカラーネガフィルム[18]を世界で初めて開発し、「アグファカラー」[19]としてリリースした。「女性はより良い外交官」(*Frauen sind bessere diplomaten,* 1941)、『ほら男爵の冒険』(*Münchhausen*, 1943)など、国内で使用実績を積み重ねたが、発色が不安定で彩度も低かったためシェアの拡大には限界があった。戦後、1950年にはイーストマン・コダック社が発色にすぐれた「イーストマン・カラー」をリリースし、カラーフィルム開発競争には事実上の終止符が打たれたが、これを受けて全世界で映画のカラー化の流れが急激に加速し、アグファカラーが根づいたドイツ語圏でも盛んにカラー作品を製作してこれに対抗した。『プリンセス・シシー』三部作でも使用されているのはアグファカラーである。

第二の転換が画面の大型化である。1953年9月、20世紀フォックス社が『聖衣』によってシネマスコープ[20]方式の口火を切って以来、他のさまざまな規格も登場して、1950年代後半には新作の映画が軒並み何らかのワイドサイズで製作されるようになり、従来のスタンダードサイズ(1:1.375)はほとんど見られなくなる。

このカラー化・ワイド化の大波は、過去の白黒・スタンダード作品のリメイクを多数生み出す原動力となった。カラーの華やかさを前面に押し出すために

---

18) 多層発色式ネガフィルムと呼ばれるもの。一本のカラーネガフィルムでカラー撮影が可能で、カラーポジフィルムに転写することで上映用のプリントを得る。

19) 当初アグファカラー・ノイと呼ばれ、先行製品の廃止とともに単にアグファカラーと呼ばれるようになる。

20) 数あるワイド画面の規格の一つ。撮影時、アナモフィック・レンズと呼ばれる特殊なレンズをカメラに装着して横幅を2分の1に圧縮し、映写時には逆に2倍に拡大して元の像を復元する方式。当初の画面比率は1:2.55、現在は一般的に1:2.35。

は、内容的にも軽く、明るいものが適している。ワイド画面の迫力を活かすには、宮廷の壮麗な儀式や舞踏会はうってつけだ。前述の『女王さまはお若い』も、戦前の白黒・スタンダード作品のカラー・シネマスコープによるリメイクの典型例であった。

こうしたリメイクの対象として白羽の矢が立ったのが、戦前の一連のオペレッタ映画である。ナチス政権下のドイツにおいては、帝政期の歴史を正面から扱う作品は姿を消し、代わりに多数のオペレッタ映画が生まれた。歌と踊りを散りばめた明るく華やかなオペレッタという演劇ジャンルを、導入間もないトーキーの利点を活かして映画に援用したものである。そこでは皇室や王侯貴族の実在人物の名前を用いたとしても、純然たるフィクションのおとぎ話であるという共通了解が成り立ち、史実との整合性は顧慮されない。ナチスは宣伝映画やニュース映画を最大限に活用して政策を効率的に浸透させることに腐心する一方で、娯楽映画においては極限まで政治性を削ぎ落とすことを良しとしていたから[21)]、こうした徹底して「非政治的」な作品はその映画政策に見事に合致したのである。

エリーザベトを描いたものとしては、例えば「王様のワルツ」（*Königswalzer*）には 1935 年の白黒・スタンダード版と、そのリメイクである 1955 年のカラー・シネスコ版がある。エリーザベトはあくまで脇役にとどまり、エリーザベトへの求婚をフランツ・ヨーゼフに代わって伝えるためバイエルンに向かう使者が、道中知り合った娘と恋をするというスピンオフ的な物語である。ここにはオペレッタの枠組みのみならず、高貴な都会の男が美しい自然の中へ出かけ、田舎の娘を見初めるという郷土映画の基本的な構造をも見て取ることができる。

21）「私はむろん、映画を宣伝のために徹底的に利用するつもりだ。しかし、観客が、今日は政治的な映画を観に行くのだとわかったうえでなければならない。スポーツ競技場で、芸術と映画が混ざったようなことを聞かされちゃたまったものではない。芸術という口実で政治的なものを見せるというのは、ゾッとするね」というヒトラーの発言が伝えられている（Hans Traub, *Der Film als politisches Machtmittel* より。飯田道子（2008）『ナチスと映画』中公新書、p. 38）。

他に、マイヤリンク事件を扱う『晩鐘』（*Kronprinz Rudolphs letzte Liebe – Mayerling*, 1955–56）においては、1931 年の「エリーザベト・フォン・エスターライヒ」で主演したリル・ダゴファーが、ルドルフの母としてのエリーザベトを再び演じている。リメイクとは言えないが、ダゴファーによるエリーザベトという連続性に注目すれば、カラーによる再演と見なしうるだろう[22]。そして 1931 年版に見られたあの息をのむような鋭い写実性は、ここではまったく影を潜めている。

＊　＊　＊

ここまで見てきたように、『プリンセス・シシー』（1955）以下の三部作や、同じ時期に矢継ぎ早に製作されたオペレッタ映画のリメイクは、戦後の占領期の長い空白期間を経たのちの、宮廷ものの復活であったと言える。戦争の痕跡がいまだ生々しく、焦土からの復興を遂げなければならなかったこの時期においては、国土の荒廃を受けていない時空間が舞台であるような郷土映画、政治性を廃したオペレッタ映画の枠組が必要とされたのである。失われた帝政時代への郷愁・憧憬が前面に出て、帝政の矛盾の象徴としてのエリーザベトの死は描かれることはなかった。

4. おわりに

エリーザベト映画の出現には、明確に二つの契機があった。すなわち、1918 年のハプスブルク君主国の解体と、1955 年のオーストリアの主権回復である。第一の時期には、帝政を内部から批判する存在としてエリーザベトが描かれた。だがその後、ナチズムの時代と占領期を経て、オーストリアという国の再出発に伴走するものとして復興したエリーザベト映画は、しかし第一の時期のエリーザベト像を反復するものとはならなかった。映画というメディウムにおける大きな技術的転換（カラー化、シネマスコープ化）の時期と重なったこと

22）画面サイズはスタンダードで変更なし。

もあり、戦後のエリーザベト映画が反復したのはむしろ、ナチズムの時代につくられた徹底して非政治的なオペレッタ映画であった。

クンツェ版のエリーザベト像は、圧倒的に有名なエリーザベト映画であり、第二の時期を代表する作品でもある『プリンセス・シシー』三部作に当然ながら多くを負っている。そのつながりは、バイエルンにおける自然児シシーの描写を通じて、故郷映画と呼ばれる大きなジャンルにもひろがっているだろうし、2作目以降のメランコリックな皇妃の姿[23]も重要なプレテクストとなっているかもしれない。しかしクンツェは、「20世紀の初頭に知識人たちが強烈に彼女を崇拝する動きがあったことを知った[24]」ことを、あくまでもエリーザベトを中心に置いてハプスブルク家没落の物語を書くに至った重要な契機としてあげている。その「崇拝」が宮廷のアウトサイダーとして、内部からの批判者としての彼女へ向けられたものであったとすれば、クンツェ版のエリーザベトは一世紀以上前に最初のエリーザベト映画を生み出した時代の批判精神と、より親しい関係にあるように思われてならない。

エリーザベト関連主要映画リスト

予告篇などの動画が閲覧できるものはURLを示した（いずれも2024年1月31日最終閲覧）。本文中で言及している作品については解説を割愛した。本文中で言及していてもエリーザベト役のクレジットが確認できないものはリストに加えなかった。テレビ映画は特に重要なもの以外割愛した。

「オーストリア皇妃エリーザベト」*Kaiserin Elisabeth von Österreich*
1920年　ドイツ　監督：ロルフ・ラッフェ　エリーザベト役：カルラ・ネルセン
https://www.youtube.com/watch?v=wbRg7ZzBWvQ

「ハプスブルク家の運命：ある帝国の悲劇」*Das Schicksal derer von Habsburg. Die Tragödie*

23）『プリンセス・シシー』三部作におけるエリーザベト像のメランコリックなクイア性については、Heidi Schlipphacke（2010）, “Melancholy Empress: Queering Empire in Ernst Marischka’s Sissi Films.” *Screen* 51:3（Autumn 2010）, pp. 232–255. を参照のこと。

24）ミヒャエル・クンツェ、シルヴェスター・リーヴァイ、小池修一郎（2016）『オール・インタビューズ ミュージカル「エリザベート」はこうして生まれた』日之出出版、p. 33.

eines Kaiserreiches
1928年　ドイツ　監督：ロルフ・ラッフェ　エリーザベト役：エルナ・モレナ
https://www.youtube.com/watch?v=oVkMbqAmKNA

「エリーザベト・フォン・エスターライヒ」*Elisabeth von Österreich*
1931年　ドイツ　監督：アドルフ・トロッツ　エリーザベト役：リル・ダゴファー
https://www.youtube.com/watch?v=00TOHuXVMy0

「王様のワルツ」*Königswalzer*
1935年　ドイツ　監督：ヘルベルト・マイシュ　エリーザベト役：カロラ・ヘーン
https://curdjuergens.deutsches-filminstitut.de/nachlass/koenigswalzer-1935-filmausschnitt-brautwerber/

『陽気な姫君』*The King Steps Out*
1936年　アメリカ　監督：ジョゼフ・フォン・スタンバーグ　エリーザベト役：グレース・ムーア
https://www.youtube.com/watch?v=V63fYq8tgCY&t=5s

『うたかたの恋』*Mayerling*
1935/36年　フランス　監督：アナトール・リトヴァク　エリーザベト役：ガブリエル・ドルジア
https://mubi.com/films/mayerling/trailer
ルドルフ大公とマリー・フォン・ヴェッツェラのマイヤリンクでの情死事件を題材にした悲恋物語。

「プリンセス・シシー」*Prinzessin Sissy*
1938年　ドイツ　監督：フリッツ・ティエリー　エリーザベト役：トラウドゥル・シュタルク
https://www.youtube.com/watch?v=zbnDo2LhL-E
幼少時代のシシーの物語で、父マックスと母ルードヴィカがシシーのためのネックレスをめぐって繰り広げる騒動を描く。

「マイヤリンクの秘密」*Le secret de Mayerling*
1949年　フランス　監督：ジャン・デラノイ　エリーザベト役：マルグリット・ジャモワ
https://www.youtube.com/watch?v=0c6hCtdQ6_E

「皇帝ワルツ」*Kaiserwalzer*
1953年　オーストリア　監督：フランツ・アンテル　エリーザベト役：マリア・ホルスト
https://www.youtube.com/watch?v=Nt3sVgjFAfo
バート・イシュルでルートヴィヒ大公が女教師と恋に落ちる。皇妃エリーザベトは二人の身分違いの恋を諌めて思いとどまらせる役回り。

『ルートヴィヒ 2 世：ある王の栄光と没落』*Ludwig II: Glanz und Ende eines Königs*
1954/55 年　西ドイツ　監督：ヘルムート・コイトナー　エリーザベト役：ルート・ロイヴェリク
https://www.youtube.com/watch?v=LwN7aGY0BQM&t=1181s
エリーザベトとは親しい関係にあったバイエルンの狂王ルートヴィヒ 2 世の生涯。

『プリンセス・シシー』*Sissi*
1955 年　オーストリア　監督：エルンスト・マリシュカ　エリーザベト役：ロミー・シュナイダー
https://www.youtube.com/watch?v=q4zV81VvWRI

「王様のワルツ」*Königswalzer*
1955 年　西ドイツ　監督：ヴィクトル・トゥルジャンスキー　エリーザベト役：リンダ・ガイザー
https://www.youtube.com/watch?v=2umLmUXeIzk&t=7741s

『晩鐘』*Kronprinz Rudolphs letzte Liebe – Mayerling*
1955/56 年　オーストリア　監督：ルドルフ・ユーゲルト　エリーザベト役：リル・ダゴファー
https://www.youtube.com/watch?v=7n4-hOFtqnw

『若き皇后シシー』*Sissi - Die junge Kaiserin*
1956 年　オーストリア　監督：エルンスト・マリシュカ　エリーザベト役：ロミー・シュナイダー
https://www.youtube.com/watch?v=Qi_hzlAEnjc

『エリザベート 運命の歳月』*Sissi - Schicksalsjahre einer Kaiserin*
1957 年　オーストリア　監督：エルンスト・マリシュカ　エリーザベト役：ロミー・シュナイダー
https://www.youtube.com/watch?v=-RHdng0ixCk&t=39s

『マイヤーリング』Producer's Showcase – *Mayerling*
1957 年　アメリカ　監督：アナトール・リトヴァク　エリーザベト役：ダイアナ・ウィンヤード
https://www.youtube.com/watch?v=71jotKI-hlc
オードリー・ヘプバーンがマリー・フォン・ヴェッツェラを演じるテレビ映画。リトヴァクによるセルフ・リメイク。

「オーストリア皇妃エリーザベト」*Elisabeth Kaiserin von Österreich*
1972 年　オーストリア　監督：イェルク・A・エッゲルス、テオドア・グレードラー　エリーザベト役：マリサ・メル
https://www.youtube.com/watch?v=OM-s-TMpue8&t=24s
皇帝フランツ・ヨーゼフとの結婚からジュネーブでのエリーザベト暗殺までを描くテレ

ビ映画。

『ルートヴィヒ』*Ludwig*
1972 年　イタリア、フランス、西ドイツ　監督：ルキノ・ヴィスコンティ　エリーザベト役：ロミー・シュナイダー
https://www.youtube.com/watch?v=yB0rIFWAlPs
バイエルン国王ルートヴィヒ 2 世の、ワーグナーへの傾倒やエリーザベトへの愛を描く。ロミー・シュナイダーがエリーザベトを再び演じた。

『エリザベート 愛と哀しみの皇妃』*Sisi*
2009 年　オーストリア、イタリア、ドイツ　監督：クサーヴァー・シュヴァルツェンベルガー　エリーザベト役：クリスティーナ・カポトンディ
https://www.youtube.com/watch?v=9YRkSdYVjOY
エリーザベトの生涯を史実に忠実に描く前後編のテレビ映画。

『エリザベート 1878』*Corsage*
2022 年　オーストリア、ルクセンブルク、ドイツ、フランス　監督：マリー・クロイツァー　エリーザベト役：ヴィッキー・クリープス
https://www.youtube.com/watch?v=_oLeqjCXerc
40 歳になったエリーザベトの 1 年間に焦点を絞り、老いとの対峙をテーマに描く。